

フィオレちゃんとアサシンに板挟みにされる俺氏。

黒三葉サンダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あれよこれよといつの間にか魔術師になっていた……。

目 次

おかしい！俺の知っているフィオレちゃんと違う！	1
真名を隠そうとしても隠しきれない子だつている。何故つてうちが そうだもの。	7
いくら自分のサーヴァントでも、話すと恥ずかしい話とかあるじやん ？	7
確固たる意思を持つて！俺は彼女の頭を撫でるっ！	14
俺の知り合いがルーラーになつてた件	18
召喚されし救いの手	22
死霊魔術とか正気の沙汰とは思えんね……くそ、イカすぜ。	28
いちいち唱えるよりも引き金引いた方が早い。当たり前だよなあ？	32
特別短編話「Merry Christmas！」	34

おかしい！俺の知っているフイオレちゃんと違う！

何故だ……何故こうなつた……！

「ふふ……見てください先生。全く動かなかつた足も、先生のお陰でこんなに動けるようになりましたよ？本当に毎日が充実してます」「そ、それは良かつたな。だが俺にはこうして君に押し倒されるようなことをした覚えはないんだけど…」

蠱惑的な笑みを浮かべながら囁くように告げてくる少女は確かに可愛らしく実に良いが、如何せん押さえられている両腕、両足がメキメキといつている。恐るべき魔術礼装！

なんとかもがいてはいるものの、礼装ガン積みの少女にマウントを取りられ続けている。

「私先生には感謝しているんです。ずっと治ることはないと諦めていた私の足を治していただいたことに、魔術師としての生命を終わらせずに済んだことに」

「へ、へえ。それは良かつたよ」

「はい♪先生と逢えたことは運命だと思つてます♪」

や、止めろ！そんな笑顔で顔を近付けてくるんじゃない！頬を赤く染めるな！息を荒げるな！マスクの開閉スイッチをまさぐるな！

俺の知っているフイオレと言う人物はもつとおしとやかで、落ち着きのある女性だつたはず！

何か落ち度があつたのか!?思い出せ……あの時のこと……！

俺、レン・クラヴエルト・ユグドミレニアは変わった魔術師であると自負している。

魔術師らしからぬ振る舞いと現代技術の併用。果ては交友関係まで多岐に渡るとも言える。生糸の魔術師としての生き方はしてない。

その為だろうか、やがて両親にも見限られ魔術師として期待されなくなつた。俺自身いつも冷たく扱つてきていた両親に身限られた所で別になんとも思わなかつたのも原因なのかも知れない。少なからず俺の中で人間的に振る舞う自分と他を冷めきつた目で眺める自分のギヤップに嫌気がさしたりもした。

今やクラヴエルト家は弟が引き継ぐことにはほぼ決定されている。それ自体は別に文句はないし、妥当といえる。

しかし問題だつたのは俺の立場、俺の盾が消える事だつた。

確かにクラヴエルト家はあまりの魔術回路の少なさと質の悪さに没落した弱小な家系だ。だが俺は、俺だけは違つてしまつた。

クラヴエルト家の歴史では過去最大の魔術回路数に質の良さ、そして滅多に見ることが出来ない稀少な魔術属性である「架空元素・虚数」。

そう。あの虚数魔術である。間桐桜と同じ魔術属性なのだ。

ああ、言い忘れていた。俺は俗にいう転生者である。別に何らかのお願いをした覚えもなければ、こんな都合の良いステータスを望んだ覚えもない。いやまあ覚えがないだけとしているのかも知れないけど。閑話休題。

ともかく、このまま後ろ楯がない状態だとホルマリン漬けにされ一生保管されるだけだ。そんな時にふと気付いたのだ。

(あれ? もしかしてここつて fate / apocrypha の世界じゃね? ユグドミレニアってそうだよな?)

と。

そう気付いてからは俺は名前を「エリクスイール」と偽り、フルフェイスマスクで顔を隠し正体を隠しながら転々と各地を歩き回つた。今では「レン・クラヴエルト・ユグドミレニア」は行方不明になつてゐる扱いだろう。一番はダーニックと関わることだが、最悪セレニケ以外なら誰でもいい。

そんなノリで魔術医師のような真似事を続けていた時に、出会ったのだ。

ファイオレ・フォルヴエッジ・ユグドミレニアと。

俺の噂を聞きつけた彼女は迷いなく俺に接触し、難題を突きつけてきたのだ。

すなわち変質してしまった魔術回路をどうにか出来ないかという難題をだ。

確かに俺の起源との相性を考えれば出来なくはないかも知れないが、ハツキリと言つて自信はなかつた。

だって普通無理じやね？聖杯に頼もうとしてたレベルでどうしようもない問題じやん。そんなん一魔術師が出来る範囲超えてるじやん！

こりや精一杯やつてみてやっぱり無理でしたって感じで乗りきろうとしたのです。

けれど予想に反して結果的に成功してしまったのだ。

恐るべし起源特化。恐るべし虚数魔術。俺は不可能を可能にしてしまったのだ！！

いや俺が一番ビツクリだわ。彼女も俺もカウレス君も反応出来なかつたし。

「嘘……！本当に……！」

「な、治つたのか!? 治したのか!?」

「……うむ……うむ！めでたしめでたし！」

その後はほんと大変だった。ファイオレちゃんは泣き出すし、カウレス君も涙を流して喜んでくれた。姉弟でお互いを思いやれる関係を羨ましく思いながらも、後ろ楯の話をしたら快く受け入れてくれた。有難いことにダーニックにも話を通してくれるそうだ。

そこから俺とフォルヴエッジ家の関係が生まれたのだ。

……ん？ そういえばその時からフイオレちゃんの様子がおかしかった気が……？

「その時からかあああ!?」

「ふふ、先生……」

「やめろお！ やめろお！ 落ち着けえ！」

止まる事なく近付いてくるフイオレちゃんの顔と指から逃れる為に何か気を引けるものはないか……!!?

そんな時、壁に掛けられた時計に目が行き俺の頭にピシャリと閃くものがあつた！

「フイオレちゃん！ 時間！ 時間だ！ そろそろ集合しないと！」

「……………残念です。この続きはまた今度に――」

「さあいこう！ すいこう！ いやあどんな英靈に会えるのか楽しみだなあ！」

泣く泣く解放したフイオレちゃんの発言を遮つて先に部屋を出ていく。

あ、危なかつた！ あのまま進んでいたら間違いない事案だつた!! 彼女のあの目は本気だつた！ 彼女にはやるといつたら必ずやるという意思の強さがあるつ!!

冷や汗を拭いながら、聖遺物を確認し直す。

正直この英靈を出せたとしても戦争には向いてない。でもまあ、回収出来たのがこれだけだつたししゃーなしだ。被つたフルフェイスマスクを調節し、広間へと歩き出す。

フイオレちゃんと一緒に広間に集合すると、黒の陣営のマスターが勢揃いしていた。ゴルドのおっさんとキチガイねえさん（セレニケ）、カウレス君が待つており、上ではダーニックとランサーが様子を眺めていた。ロシェとキヤスターはいつも通りホムンクルスのところか

な？

「遅いぞ小僧！」

「姉さんに手を出してないな…………？」

「さつさと済ませましょう」

「ごめんなさい、遅れました」

「悪いなおつさん！すぐに始めようぜ！」

ゴルドのおつさん達に謝つてささつと持ち場につくと、予め用意していた魔法陣の中心に聖遺物である包丁を置く。スーッと息を肺に取り込んで、吐き出す。

そして詠唱を開始した。

「素に銀と鉄。 硏に石と契約の大公。

手向ける色は黒。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。

——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。
誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷くる者。

汝 三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！

五人の詠唱は無事に成功し、それぞれの魔法陣が光を放つ。
そしてその光の中から五人の英靈が呼び出された。

「サー・ヴァント、セイバー。召喚に応じ参上した。よろしく頼む」

一人は大剣を持った、歴戦を思わせる鎧の剣士。

「サー・ヴァント、アーチャー。召喚に応じ参上しました。よろしくお願ひしますね、マスター」

一人は長い髪の男性で、優しそうな弓兵。

「サーヴァント、ライダー！召喚に応じ参上したよ！みんなよろしくね！」

一人はピンクのおさげをした青年……青年？青年だよな？

「ウー……」

一人はドレスに身を包んだ一本角の少女。

みんな思つた通りの英靈を召喚出来たようだ。そしてこつちは――

「サーヴァント、アサシン。召喚に応じ参上しました！一生懸命頑張りますけど、失敗したらごめんなさいね！」

――黒い帽子に白いドレス、傍らに羽の生えた卵のような生物を侍らせた女性だつた。その姿はまさに絵画通り。

なんともまあ朗らかな英靈を召喚出来てしまつたようだ。

真名を隠そうとしても隠しきれない子だつている。何故つてうちがそだもの。

無事召喚を終えて、ほつと息をつく。まあ俺の顔なんてマスクのせいで見えないから動じてないよう見えると思うけど。

「あなたが私のマスター？」

「ん？ああ。キミのマスターのエリクスイールだ。出来れば今後の為にも名前で呼んでもらえると助かるよ」

「エリクスイール……分かりました！エリーつて呼ばせてもらいますね！」

「え、エリーか……いや、キミがそれで良いなら良いか」

無邪気にひょこひょこと俺に近付いてくるアサシンに自己紹介とお願いをすると、一旦思案顔をすると笑顔で渾身の呼び名を作り出してしまった。なんか女の子っぽい呼び名になってしまったが、まあなんだ。彼女が楽しそうにニコニコしてるので見てるとどうでもよくなってきた。

にしても改めてステータスを見ると、やつぱり戦闘向きじゃないな。まあ史実通りなら只の町娘同然だし当たり前か。

「ごめんなさいね？エリー。私戦闘にはちょっと自信がないの……」

「それは構わないさ。俺たちには俺たちの戦い方がある。とにかく今後ともよろしくくな

「ええーええーもちろん！あなたみたいな優しいマスターに呼ばれてよかつたわ♪」

うむ。實に人懐っこい子だ。俺としてもフレンドリーに接することでが出来るのは大歓迎だ。

聖杯戦争においてサーヴァントとの相性は非常に大切だし、黒の陣営での致命的な弱点になりかねないからな。

何故か背中に突き刺さるフィオレちゃんのジト目から気を反らしつつ、そろそろ始まるであろうライダーの自己紹介タイムに耳を傾ける。

「はいはーい！ ちょっと足りない気もするけど、折角の仲間同士なんだし自己紹介しようよ！ 先ずはボクから！ サーヴァントライダー、真名はアストルフォだよ！」

唐突な黒のライダーの名乗りに数人に少し動搖が走り、俺はそのノリの軽さに苦笑する。事前に真名交換はするという話はあつたが聖杯大戦くらいだろうな、そんなことをしてられる余裕があるのは。

「はいじゃあ次！ 君の名前は？」

「私はサーヴァントアーチャー、真名はケイローンです」

「へえ？ ケイローン……むむむ、まあいつか！ ケイローンだね！ しばらくの間よろしく！」

「はい、こちらこそ」

「ライダー、呼ぶときはクラス名で呼びたまえ。どこから情報が漏れるかわからぬのだからな」

「ああそうか！ ゴメンゴメン！」

ダーニックの指摘にあははとあまり反省の色を見せないライダー。いや反省はしてるだろうけど、あんまり表にはわからないよな。まあそれくらいなら可愛いもんだ。

「はい次！ 君の名前は？」

「……ウウ」

ライダーが次の標的を定め絡みにいくも、バーサーカーは少し唸りながら首をフルフルと横に振るだけだった。

確かにこの時は自分の真名を教える危険性を理解していく断つてたつて話だったか？

しかしそんなことをライダーが理解出来るわけもなく。

「あ、そつか！ バーサーカーだから喋れないんだね！ ゴメンゴメン！ ジゃあこの子のマスター！ この子の名前は？」

「あ、ええと……フランケンシュタイン……」

「フランケンシュタインだね！ よろしくフラン……バーサーカー

！」

「……」

少し言い淀むカウレス君だが、事前の打ち合せもあつてか真名を

教えてしまう。

うわあ。バーサーカーの表情はあんまり変わつてないけどちよつと雰囲気が変わつたわ。こりや機嫌悪くなつてゐるな。カウレス君強く生きて！

でも後のことを考えると絆を結べたのはアーチャーとバーサーカーの組だけだよな。ああ今はロシェとキヤスターは問題無さそつか。ふふ、介入しておいて良かつたぜ。

「ほいじやあ次は剣の人！」

「……オレは――」

「待て！セイバー。お前は何も喋るな」

セイバーが名乗ろうとした瞬間、マスターであるゴルドが待つたを掛ける。まあセイバーの逸話上隠したくなる気持ちは痛いほど解るけどね。すまないさんは超強いから味方だと頼もし限リだ。

因みに現在セレニケがゴルドのおつさんにくつかかつてゐるが、ゴルドは鼻を鳴らしてセイバーと共に部屋を出ていつてしまつた。

うーん……セイバーは早期で失いたくないし、あとでちよいとゴルドのおつさん所に絡みにいくか。

「ありやく、行つちゃつた。仕方ないか。はいじやあ最後！そこの可愛い女の子！」

「私ですか？サーヴァントアサシン、シャルロット・コルデーです！これからよろしくお願ひしますね♪」

因みにアサシン——シャルロットの自己紹介に驚く人物は誰もいなかつたことをここに明記しておく……。

いくら自分のサーヴァントでも、話すと恥ずかしい話とかあるじやん？

与えられた部屋にアサシンと戻り、お互にゆっくりとした時間を過ごす。ファオレちゃんに襲われかけた日とは思えないくらい平和な時間だ。

いや彼女も普段はおしとやかな淑女の筈なんだが、どうも俺が関わると少しポンコツ気味になりがちだ。

おかしい。前はもつとしつかりした子だつたのに！

「どうぞエリー。お口に合うかわかりませんけど」

「ありがとう。そうだ、キミに聞いておきたいことがある」

「はい、なんでしょうか？」

「聖杯のこと。すなわちキミの願いはなんだ？」

アサシンが入れてくれた紅茶を受け取り、彼女も席に着いたタイミングで質問を投げる。

サーヴァントは誰しも願いを持つて聖杯戦争に参加している。黒陣営のサーヴァントたちの願いはあんまり覚えてないけど。確かシャルロットの願いは……

「願い……ですか。そうですね。実をいうと私、叶えたい願いつて無いんです」

「ふむ」

だよなあ。なんで聖杯戦争に参加出来たのかわからないレベルで無欲だよなこの子。いやまあ人並みの欲はあると思うけど、基本的にいい人過ぎる。

よく呼べたな、俺。

「エリーは何かお願いがあるのでしよう？」

「……あれば良かつたんだけどな」

「あら、エリーも無いんですね」

「願いは無いな。でも夢ならある」

「お願いと夢は違うんでしようか……」

「勿論別物さ。願いは自分では叶えられないものを他に叶えてもらうための手段であり、夢というのは自分で手に入れることが出来る可能性があるものだ。確かに俺には夢がある。でもそれは聖杯無しでも叶えられる可能性のあるものだから、わざわざ聖杯なんていう神秘に願う必要はないのさ」

「へえ……それじゃあエリーの夢つてなんなんですか？ちょっと気になります！」

「それは……」

興味深げに話を聞いていたアサシンはコロコロと表情を変えながら聞いてくる。

……流石にこれを話すのは気が引けるというか、恥ずかしいというか。しかしそんな俺の気持ちを知つてか知らずか、純粹無垢な眼で見つめられたら白状するしかない。

「……家族だ」

「家族？」

俺の答えに可愛らしくてんと首を傾げるアサシンに苦笑する。今もマスクを被つている為、赤くなつた顔は見られることはない。

「昔、レン・クラヴェルト・ユグドミレニアという一人の青年がいた。その青年は生まれながらに特異な体質と魔術に悩まされていた。両親には愛してもらはず、歴代の中で最優秀だという理由だけで育てられてきたのだ。ただ魔術師としての生き方だけを教えられていた彼は、そんな生き方に辟易して家を出たのだ。今では彼の弟が家を継ぐことが決定されているだろう。その後、彼は行方不明となつた」「それって……」

「さあ？ 彼は今でも生きているのか、もう既に息絶えているのか。それは俺にも分からない。まあそれでも案外何処かをふらついてるかもしれないけどね。そんな彼と俺の境遇は非常に似ている。俺も家族っていうのに、愛というものに餓えてるのかも知れないな」「そう、ですか……」

久しぶりに長々と喋つたせいか喉が乾いた。マスクの開閉スイッチを弄り、口元だけ開けて紅茶をいただく。

少し冷めてしまつたが、心地の良い香りが鼻を抜ける。

ふむ。家事全般を任せてみても良いかも知れない。

そんなことを考えてたら、突如席をたつたアサシンが俺の前まで来ると頭を抱きしめられた。

……は？え？は？

「な、なななにをしているんだ!?」

「大丈夫ですよ。あなたなら絶対に叶えられます。だつて私がこんなにもエリーを可愛くおもつたんですから」

「は!? 可愛い!? キミは一体なにを言つている!?」

「私で良ければ一緒にしますからね、エリー♪」

なんだ!? 何故こんなことになつてている!? 幸いマスク越し故に感触は殆ど感じなくて悔し——じやない！ 幸いだといつてるだろう!?

こんなところ誰かに見られでもしたら——

コンコン

『先生？ 今大丈夫ですか？ ちょっと相談したいことがあるんですけど』

「あら？あの声、アーチャーのマスターさんですね。開いてますよ』

「ちよつ!? 待て!?』

『その声はアサシンね。先生、入りますよ』

「今は駄目だ！ フイオレ!!』

ガチャ

俺の必死の声もフイオレちゃんに届かず、無情にも扉は開かれてしまつた。

「……先生？ 何をしてるんですか？ 詳しくお話を聞かせていただけますよね？」

あ、
終わつた……

確固たる意思を持つて！俺は彼女の頭を撫でるつ！！

にこやかに、されど圧を感じさせるファイオレちゃんの雰囲気にマスク内で冷や汗がツーッと流れるのが分かる。

俺の頭はアサシンの胸の中に文字通り埋もれており、こそっとマスクの口元を隠したのはバレてはいないはず。

「せーんせつ。どうしてそんな所に頭を埋もれているんですか？ねえ先生？」

「違うぞ！これは俺の意思じゃない！断じて俺が自らここに頭を埋めているわけじゃない！」

「……なるほど。そこのアサシンですね？アサシンがやつてるんですね？」

「そうですよ。私が自分でやつてるのです♪エリ一ったら可愛くてつい♪」

「だから俺のどこに可愛さがあつた!?男は可愛いと言われても複雑な気持ちになるだけだぞ！」

「確かに先生に可愛い一面があることは否定しません。」「しないのか?!」

ファイオレちゃんもアサシンも穏やかに会話してるっぽいが、アサシンはともかくファイオレちゃんの圧を今なおひしひしと感じる！早く放して！？ご機嫌取るの俺なんだよ！

もう何とか自力で脱出しようと体を動かすが、その度に感じてはいけない柔らかさを感じてしまう！

「んっ……エリー、くすぐつたいです♪
「ばっ!?止めろそんな声出すな！」

「……先生。楽しそうですね？」

「ぐつ、くつ……ふはっ！こんな状況で楽しめるか！しかもマスク越し
しだぞ!?こんなのは生殺しではないか!?……あつ」

力が緩まったく瞬間アサシンの腕から逃れた俺はつい本音を漏らしてしまった！

し、仕方ないだろう!?俺だって男なのだ!!理性の強さには自信があ

るがそれとこれとでは話は別だ！

しかし反応の無いフイオレちゃんが気になり恐る恐る確認すると、涙目になりながらプルプルと震えていた！

「ふい、フイオレちゃん？」

「……いです」

「えつ？」

「ずるいですっ！アサシンばかり！私も先生を甘やかしたいです

!!

「そつち！」

「あら？」

半ばやけっぱちのように振り切れたフイオレちゃんの叫びに動搖が隠せない。ほれ見ろ！アサシンもポカーンと呆けてしまっているじゃないか！

しかし今のフイオレちゃんは振り切れモード。止まる気配が見えない！

「アサシンよりも無いかもしませんけど、私だつてあります！」

「そこ主張されても反応に困るから！とにかく落ち着いてくれ！」

「先生つたら私のこと全然見てくれませんじゃないですか！私だつて先生にしつかり見てほしいんです！」

「エリー、ごめんなさいね？ちょっとふざけすぎたみたい……」

「ああもう！落ち着けフイオレ！」

やむを得ない！本格的に泣き出す前にフイオレを引き寄せてぎゅっと抱きしめる。そして落ち着かせるように背中をポンポンと叩いてやる。

「あつ……先生……？」

「よーしよしよし、俺はちゃんとフイオレちゃんのこと見てるからな。キミがリハビリを頑張つてたことも知ってるし、魔術を学ぶ姿勢だつて見守つてきた。さつきのは本当に悪気は無かつたんだよ。俺も、アサシンも」

「ごめんなさい。まさかそこまで嫉妬されるとは思つてなかつたの」

「……本当ですか？」

「ああ本当だとも。俺がキミに嘘をついたことがあつたかい？」

そういつてファイオレの瞳を覗き込む。俺は一度足りともファイオレちゃんに嘘をついたことはない……筈だと思う。

最も覗き込んだところでファイオレちゃんからは俺の瞳が見えない訳ですがね！

「……無いです。わかりました。先生の言葉を信じます」

「ありがとうございますファイオレちゃん」

「ファイオレ」

「……ん？」

「ファイオレと呼び捨てにしてください。さつきみたいに」

「……分かったよ、ファイオレ」

「ありがとうございます♪ふふ♪」

ようやくファイオレちゃん——ファイオレを落ち着かせることに成功した、と思いまきや。

それは突如アサシンから放たれた。

「んー、エリー。アーチャーのマスターさんにもしてもらつたら良いんじやないかしら？」

「ふあつ!!」

「それは名案ですね！ど、どうぞ先生！少し緊張しますけど……せ、先生になら……」

「へあつ!!」

こいつ！落ち着いたと思いきやとんでもねえ爆弾投げやがった!!

嵌めたなアサシン!?これがキミの暗殺だとでも言うのか!?

しかし彼女にそういう感情は見られず、ニコニコと朗らかに笑っていた。素の善意かよおおお!!尚更断り辛いし責めらんねえよおおお!!

ファイオレも少しモジモジしながらも、顔を赤くして両腕を広げてウエルカム状態！流されるなファイオレ！キミは芯の強い女の子な筈なのだ！

「先生……」

「ぐつ!!」

止めろそんな切なそうな顔をするんじやない！マジでいけない感情になっちゃうだろお！？

落ち着け俺！理性最強が俺のモットーだろ！？

はつ！？そ、うだ！奴は！？ケイローン先生はどこだ！？

ケイローン先生!!助けてくれ!!あなたならこの状況も打破出来る筈だ!!

『すみません、アサシンのマスター。マスターは貴方に会いに行くのを楽しみにしてたのです。どうか理性を強く保ってください』

ケイローン先生ええええ！？こんなときに頼れねえなちくしょう！

こうなつたら乗り越えてやんよお!!

「……それは出来ない。だから、代わりにこれで許してくれないか？」

「ふあ……」

必殺の頭ナデナデ！俺には撫でポ程のチートはないが、今のフィオレになら効力はある筈だ！あつてくれ！

そんな祈りが通じたのか、フィオレは気持ち良さそうに眼を細めてナデナデを受け入れていた。心なしか瞳がトロンしてきた気がする。

何故だ。乗り越えた筈なのに冷や汗が止まらない？

「せんせえ……もつと……」

「あつはい」

結果、フィオレは俺のナデナデに嵌まつてしまつたことをここに記しておくことにする。

どうしてこうなつた……？

俺の知り合いがルーラーになつてた件

夜道をバイクで疾走する。もしかするとゴルドのおつさん達が先に戦闘を開始してゐかもしない。

フイオレちゃんの頭ナデナデ事件の真っ最中にホムンクルスがルーラー抹殺案件を報告しに来てくれなければ危なかつた。べ、別に？俺がフイオレちゃんにナデナデするのに嵌まつてた訳じやないし？

「エリー！そんなに飛ばして大丈夫ですか！」

「ははっ！運転は慣れたもんさ！ フランス万歳！」

久しぶりの疾走感に心が踊る！あいつと一緒に走つた頃が随分と懐かしく感じるな。

後ろに乗りたいとはしゃいだアサシンを乗せて移動していると、進行方向先で激しい戦闘音がここまで聞こえてくる。十中八九黒のセイバーと赤のランサーが打ち合つてる音だろうな。ヤベー、戦闘音だけで生きた心地がしねえわ。ゴルドのおつさん死んでないよな？ルーラーも一緒にいる筈だから大丈夫だとは思うけど。

「え、エリー。本当に私戦闘は苦手なの」

「安心しろ。キミをそんな地獄に送り出す気はないから」

英靈からかけ離れた朗らかさとほぼ最底辺のステータス

であるアサシンをあんな戦闘に参加させたらどうなるかは火を見るよりも明らかだ。そもそも俺が彼女に求めているのはサーヴァント同士の戦闘ではない。

だからプルプルと震えながらそのたわわなメロンを押し付けないで欲しい！コート越しからムニユムニユとした感触がダイレクトに伝わつてるんですありがとうございます！

そんな天国を味わいながらも正面に目標が見えてきた。

「やっぱり打ち合つてるのはセイバーとランサーか」

「やっぱりって、わかつてたんですか！」

「まあ何となく」

気軽に話しながらも高速で飛来する石礫を避けながら大きく迂回

する。ルーラーの近くの方が安全だし、ゴルドのおつさんとも話せるしね。

因みに後ろでキャアキャアとアサシンが悲鳴を上げているので赤のランサーからは丸わかりだろう。

チラリと赤のランサーと視線が交差するが、此方へは攻撃せずにセイバーと打ち合いを続行している。多分あれだ、優先順位はセイバーの方が高いんだろう。俺ら二人ともランサーよりも弱いし。

今のうちに俺の鮮やかなドライビングテクニックでルーラーの後ろへと滑り込み、バイクを止める。

「むつ!? 小僧!?

「貴方は……」

「やあ、ルーラー。初めまして、の方がいいかな?」

「一応貴方の事は彼女の記憶にあります。ですが初めましてで良いと思います」

「なら初めましてだ。俺は黒のアサシンのマスター、エリクスイールだ」

「此度の聖杯大戦の調停者、ルーラーです。よろしくお願ひします。黒のアサシンにエリクスイール」

「よろしくお願ひしますね、ルーラーさん♪」

「ほら、アサシン。かの有名なジャンヌダルクさんだ」

「えっ!?あの!?フランスの聖女様!!」

アサシンにルーラーの事を告げると、アサシンは憧れの人物に会えた事にテンションが鰐上がり。キラキラとした瞳でルーラーへと詰め寄っていく。

そんなアサシンの姿にたじたじになるルーラー。

キミの気持ちはわかるぞ。グイグイくるもんな、彼女。

「は、はい。そうですけど……貴女も有名ですよね？暗殺の天使、シャルロット・コルデー」

「ふわあ♪聖女様とお会い出来るなんて夢のようです！今度お城では是非一緒にお茶でもどうですか!?」

「ふむ。それはいい。俺も是非ジャンヌダルクの話をじかに聞いてみ

たいと思つていたんだ。どうかな?」

「いえ、私はどちらの勢力にも与するつもりはありませんので……」「何だったら町の喫茶店でも構わない。味方になつてくれとも言わないこととキミを攻撃しないことを俺は約束しよう」

「いえ、しかし……」

「……何故こんなに緊張感の無い状況になつとるんだ」

「すまんな、ゴルドのおっさん。これもまた親友に出会えた時の土産話の為だ。あいつなら絶対喜ぶからな。」

そんな戦闘中とは思えないのんびりとした空気の中で、赤のランサーが撤退するのを確認した。

うわあ、あのランサー最後まで俺のことチラ見していきやがつた。何もしてない筈なんだけどなあ……

ゴルドのおっさんの説得虚しくルーラーは独自で動く事にし、すぐそこと車に戻つていく姿を見送りながらセイバーに声をかける。

「なあセイバー」

「……?」

「お前はお前だ。自分を貫けよ、セイバー。お前は俺たちの希望なんだからな」

「……!」

「今度ゴルドのおっさんと一緒に飯でも食おうな」

「……すまない、アサシンのマスター。感謝する」

セイバーが霊体化してゴルドのおっさんと共に去つていくのを見送り、ルーラーへと向き直る。

まだ俺のやることは終わつてないのだ。

「じゃあ行くか、ルーラー」

「え? いや、だから私は……」

「違う違う。俺たちの拠点じやなくて、次の町までさ。歩いて行くのもこつからじや大変だろ? 乗せてくよ」

「ですが……」

「大丈夫だ。赤の陣営に襲われたらこつちで対処する」

「……分かりました。それじゃあ次の町までお願ひします」

「任せられた。アサシン、キミは靈体化していくれ」

「はーい♪……浮気はダメですよ? エリー?」

「う、浮気じゃない!」

「あらあら♪ふふ♪」

「?」

アサシンが靈体化してルーラーが後ろに乗った事を確認し、しつかり掴まるように言つてから走り出す。

勿論、上空で此方を見下ろす使い魔に気付きながらも。

なあ見てるんだろ? シロウ・コトミネ。あんたに会いに行くのはもう少し後にさせてもらうからな。

……にしても、やつぱりルーラーも結構良いものをお持ちのようだ
……みんな発育良すぎない?

召喚されし救いの手

痛い。痛い。痛い。

編み上げた魔方陣の中心で膝をついて項垂れる。身体中がアザだらけで、切り傷も傷口が開いている。そこからドクドクと真っ赤な血がこぼれ落ちていく。

「何をしている。早く立て。休んでいいとは言つてないぞ」「ごめん、なさい。父さん……」

膝に力を入れて立ち上がるが、力が入らずガクンと崩れ落ちる。それを両腕で支えてなんとか倒れ伏すのは避けた。

けれど支えている両腕も限界が近く震えてしまっていた。過剰な連続魔術行使に魔力は底をつきかけ、魔術回路に負荷が掛かっている。

「チツ。早く立て！ アレはもつとスマーズにこなしていたぞ！ これくらいは欠伸をしながらでもこなせていた！」

「はい……父さん……」

身体に残った力を振り絞り立ち上げた瞬間、身体中を鋭い刃物で切り刻まれるかのような痛みに苛まれて血溜まりへと倒れる。顔だけでも父さんへと向けると、その表情を苛立たしげに歪ませていた。

「この出来損ないがつ！！」

「ガツ！」

父さんの蹴りが脇を抉り、呼吸が一瞬出来なくなる。

何とか肺に酸素を送り込もうとカヒュー、カヒューと浅く呼吸を繰り返す。

痛い。痛い。痛い。痛い。

兄さん……どうして僕を置いていつたの……？

なんでも出来る兄さんに憧れた。だから兄さんに追い付けるようについて必死に魔術の勉強をした。身体の動かし方だつて学んだ。兄さんが言つていた科学技術だつて触れてきた。

兄さんが褒めてくれたから。兄さんだけが僕を見ていてくれたか

ら。

だから僕は頑張つてこれたのに。

「クソツ！ やはりコレではアレの代理品にすらならないか！
ああああ！！ 腹立たしい!! アレほどまでの才能は今後生まれると
もわからんというのに!! こんな出来損ないだけを残して消えるな
ど親不孝ものがっ!!」

「うぐつ！ がぎやつ！」

「腹立たしい！ 腹立たしい！ 腹立たしい!! コレでは我らが歴史を飾れ
ぬ!! 奇跡から見捨てられる!! クラヴェルト家の可能性がチンケなも
のへと成り下がつてしまふ!!」

血反吐を吐いても、痛みを訴えても父さんは僕を蹴り続ける。

痛い。痛いよ兄さん……助けてよ……。

なんで僕は殴られなきやいけないの？

なんで僕は蹴られなきやいけないの？

なんで僕は兄さんに見捨てられたの？

……なんですか？

なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん
でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなん
でなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでナンデナンデナンデナン
デナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンデナンテ？

……そつか。兄さんは僕が嫌いになつちやつたんだ。
だから兄さんは居なくなつちやつたんだ。

僕がグズだから。僕が下手だから。僕が弱いから。僕が泣き虫だ
から。僕が頼りないから。

僕に、価値がないから。

じやあどうすればいい？

僕がグズじやないと、僕が下手じやないと、僕が弱くないと、僕が泣き虫なんかじやないと、僕が頼りになると、僕に価値があると兄さんに知つて貰えればいいんだ。

じやあどうやつて？

僕が何かを、偉業と呼ばれるような何かを成し遂げればいい。魔術協会も、ユグドミレニアも、父さんも、兄さんもが認めるような偉業を。

欲しい……そんな機会が……そんな力が……。
願う。ひたすらに願う。抗える力を。暴力的なまでの力を。
無いもの尽くしの僕が得られるような力を！

「……っ！あつっ！……？」

只のちつぽけな弱者が願う不可能。叶う筈のない奇跡。
見たことのない刻印が僕の手の甲に焼けるように現れた。それから暖かくて、力強い魔力を感じる。

そして僕は、知らない筈のそれを口づさむ。

まるで抗えない程の大きな何かに導かれるように……

「素に銀と鉄。 硙に石と契約の大公。

手向ける色は赤。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

「——ん？ なんだ？ なにをしている？」

父さんが訝しむように僕を睨み付ける。

けれど詠唱は止まらない。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。
繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する。」

「これは……!? やめろ!! 今すぐにやめろ!!」

父さんが何かに気付き、僕を止めようと蹴る力を強くしていく。
けれども僕は止まらない。まるで自分の意思とは関係なく。

「——告げる。

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

「その詠唱が何をするのかお前は知っているのか!? それはお前には出過ぎたものだ!! 今すぐに止めろ!!」

父さんがヒステリック氣味に叫ぶ。まるで兄さんが消えたあの日
みたいに、無様な姿だ。

僕はにやける顔を隠そうともせずに続ける。

どうせもう止められないし、止めるつもりもない!!

例えこれが破滅を呼ぶとしても! あんただけは絶対に道連れにしてやる!!

「誓いを此処に。

我是常世総ての善と成る者、
我是常世総ての悪を敷く者。

汝 三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

「やめろおおおおおお!!!」

僕の真下にある魔方陣が光り輝き、僕も父さんも目を開けてられずに閉じる。

すると、身体から謎の浮遊感を感じる。

いや、これは……抱き抱えられてる?

太陽の光のような暖かさに包まれているかのようだ。

恐る恐る目を開けると、そこには僕を抱き抱える圧倒的な存在が——英雄がいた。

「サーヴァント、ランサー。召喚に応じ参上した。オレの槍をマスターの為に振るうことを誓おう」

「ラン、サー……」

ランサーは状況が理解出来ずに呆ける僕に向かつて優しく微笑んでくれたのだつた。

「……ん」

「起きたか、マスター」

静かに目蓋を開けベッドから身体を起こすと、壁に背を預けて此方を見ていたランサーと視線があつた。

あれが夢だと分かっていても、そこにランサーがいることに安堵す

る。

「黒のセイバーはどうだつた？」

「あれは紛れもない英雄だ。本氣で戦うに値する」

「じゃあそのマスターは？」

「正直脅威にもならないな。だが、一人だけ気になつた奴がいる」「気になつた？ランサー程の英雄が？」

僕はランサーを最強のサーヴァントと信じている。だからこそ彼が気に掛ける相手を僕も気になつてしまふ。

「ああ。得体の知れない何かを感じた。場馴れしていたとも思える。サーヴァントの戦いを前にルーラーと談笑していた胆力には感服したぞ」

「へえ……それは、僕も確認しないとね」

ランサーが興味を持つた相手だ。もしかすると黒のセイバーと同レベルの存在かもしれない。

準備は怠らないようにしよう。あの胡散臭い神父にも……いや、もう知つてるか。

「見ててね、兄さん。僕はランサーと一緒にこの戦争に勝つて見せることから。そしたらきっと――」

また褒めてくれるよね？兄さん。

死靈魔術とか正氣の沙汰とは思えんね……くそ、イ力すげ。

ルーラーを送り届けてから数日、ベッドの中にアサシンが侵入するイベントやファイオレが風呂場に突撃してきた事件があつたものの何とか元気に過ごしている。

しかしゴルドのおっさんとセイバーとのお話案件はまだ出来ていないので密かにタイミングを見計らっている。

そんな俺は現在謎の卵（天使もどき？）を抱えながら皆と一緒に赤のセイバーとそのマスターの躊躇劇を眺めている。キヤスターが作り上げたゴーレムとホムンクルスたちが一人に襲いかかるが、ゴーレムは赤のセイバーに叩き壊されていきホムンクルスはマスターに撃ち殺されていく。その殲滅速度が速いのなんの。

「さすがセイバーと言うべきかな」

「ええ。筋力B+、耐久A、敏捷B、魔力B。……幸運を除いてC以下が存在しないとはまさに剣の英靈に相応しいステータスでしょう」

「死靈魔術か……墓荒しとは恐れ入る……」

ランサーの言葉にすかさずダーニックが赤のセイバーのステータスを解読していく。そのステータスの高さに一部からほう、という感心した声が聞こえてきた。

余談だがうちのアサシンは基本ステータスは殆ど最低値のEである。無論アサシンと赤のセイバーでは戦闘にすらならないだろう。本人も力の差はハッキリと理解しているので俺の服の袖をキュッとつまんでプルプルと震え、少し涙目になつて赤のセイバーと俺の顔をチラチラと見ている。

「え、エリー……あれは無理です。絶対無理です」

「おおよしよし。適材適所つて言葉があるからね。キミはあれを気にしなくていいからな」

「ああエリー……あなたがマスターだということに心の底から感謝します！」

「……ほん。更に注目すべきは一部ステータスを隠蔽している節があるということです。恐らくは宝具の効果かと」

怯えるアサシンをあやしていると、ダーニックから静かにお叱りを受ける。因みにさつきまで離れて見ていた筈のフィオレがいつの間にか俺の隣で映像を見ていた。

こつわ。足音全然してなかつたぞ！

しかもアサシンに対抗してか皆に見えないようにちよこんと袖口をつまんでいる。俺はむしろキミの魔術礼装が怖すぎるよ。

「セイバーよ。君は赤のランサーと戦つたそうだが……どちらが強いと思うかね？」

「…………」

「赤のランサーの強さはじんじよ——『いやあ赤のランサーは確かにヤバかつたが、だからと言つて戦つてもいない相手と比べるのは難しいと思うが』——小僧！ 被せるな！」

「まあまあ落ち着けよおっさん。そもそも俺たちマスターがサーヴァントの強さの優劣を決めつけるのは早計じやないか？ 実際に戦うのはサーヴァントなんだしな」

「ぐぬ……」

「ふむ。確かに君の言い分にも一理ある。どうかね？ セイバー」

「……赤のランサーは強い。だがこれを見る限り赤のセイバーも相当な手練れだと分かる。どちらが強いかと問われれば、実際に赤のセイバーと打ち合つてみなければ分からぬ」

セイバーの言葉にランサーが少し思案顔をすると、その視線を今度はアーチャーへと向けた。何となくその瞳は楽しそうだ。

「大賢者よ。君はどう考える？」

「そうですね。セイバーの言う通り難敵であることは違ひないでしょ。ですが単騎で行動し、マスターの顔も魔術特性も判明しています。宝具の性質さえ判明すればさほどの問題は無いようと思われます」

フィオレの視線に頷くと、アーチャーはスラスラと意見を述べていく。流石は我等が大先生。その英雄としての風格はまさに頼れるイ

ケメン。アーチャーの言葉に満足そうにするフイオレが可愛らしい。
え？ なんていきなり小指を握り始めたのかなフイオレさん？ そ
んないい顔で小指にぎにぎされても柔らかお手々が気持ちいいだけ
ですよ？ まさか俺の考へてることがバレてる？ ははつ、まさか
な。

「それにしても……先生のゴーレムがあんなに簡単に……」
「そんなに落ち込むことはない。僕たちのゴーレムはまだまだ改良出
来るさ」

「先生……そうですよね！ 僕も頑張ります！！」

キヤスターの作ったゴーレムが容易く破壊されたことにロシェが
ショックを受けているものの、キヤスターが励ましたことにより元の
元気さを取り戻した。

うむうむ。仲良き事はよき事かな。ロシェに先にキヤスターを召
喚することをオススメした甲斐があつたものだ。キヤスターの裏切
りは回避したいし、向こうの質の悪いアサシンの宝具対策も兼ねて素
材を一部奪えたのが響いてきたな。

伊達に各地を練り歩いていた訳ではないのだよ！

因みに資金は無論、ダーニックが中心だ。財力万歳！

まあ全部奪えた訳じやないからせいぜいが弱体化くらいだろうけ
ど、完成状態より遙かにマシだ。

「さて、ダーニック。俺も少し単独行動させてもらえるかな？ 最近チ
ラホラとまた羽虫が飛び回ってるみたいでね。少し散らして来ると
しよう」

「……いいだろう。君の実力なら安心して任せられる。君の自由にす
るといい」

「あいよ。……ああ、それと。ゴルドのおっさんが暴走しないように
見ておいた方がいいぞ」

「それは……いや、肝に銘じておこう」

ダーニックに耳打ちし、一度自室へと向かう。

そもそも魔術師の調達もしないといけないし、準備は怠らない方が
いい。

後はゴルドのおっさんが無駄撃ちしなければいいんだけどな……。
にしても死靈魔術かあ……ちょっとカツコいいじゃねえか。

いちいち唱えるよりも引き金引いた方が早い。当たり前だよなあ？

トウリファスの城下街をゆっくりと歩く。辺りはもうすっかり暗くなり、街の電灯がぼんやりと道を照らす。回りには人の気配を感じられず、気味が悪いほど静かだ。

地下墓地には未だ獅子劫が拠点としている筈。この世界じや大量殺人は起きていないからシギショアラへの調査依頼も届いていないだろう。赤のセイバー組との対面は極力控えたい。

『アサシン、初仕事だ。この街に魔術教会が送り込んだ増援がいる。これからそいつらを探して奇襲を掛ける。気は進まないかも知れないけど、頼む。ああそれと、手強い魔術師がいたら報告してくれ。すぐにつちに向かうから』

『分かったわエリー。あなたの指示に従います』

『ありがとう』

近くからアサシンの気配が消える。素敵しに行つてくれたのだろう。弱小とはいえサーヴアント。そこら辺の魔術師くらいなら殺れるはずだ。流石に一流は難しそうだが、それは俺が狙つてる物なので好都合。

コート下のガンポーチから拳銃を抜き、クルクルと器用に手のなかで回しながら索敵を開始する。

この拳銃はフイオレに協力してもらつて作られた魔術礼装であり、厳密に言えば拳銃っぽい別物だ。弾倉は無いし、弾丸を撃ち出すことは出来ないが詠唱の代わりにトリガー引くだけでガンド等が飛ばせるオーバーテクノロジーだ。殆どフイオレが勢いで作つた代物である。

そう、あのイカれ礼装を作り出したフイオレが作つたものだ。しかも何故か妙に力を入れて作つたらしく、当人は

「先生にお渡しする物を中途半端に作るなど許せません！先生にピツタリな物を作り上げてみせますので、少々お時間頂きます！」

「先生、完成しました！性能は私の魔術礼装とほぼ同レベルだと思します！ちよこーっとだけ、私の魔術礼装より性能が上かもしませんが……先生なら大丈夫ですよね！（私だと思って）大切に扱ってくださいね？」

ということらしい。ん？何か聞き逃したような……まあいいか。フィオレの技術は嫌というほど知つてるし体験してる（押し倒されたり拘束されたり）し、信頼は出来るだろう。

てかあの魔術兵器と同レベルとかなんてもの作り出したんだ。原作よりも能力上がつてない？君。お兄さんにサーヴァントとガチんコバトルしてこいつてか。虚数魔術持ちでもサーヴァント戦は辛いもんは辛いんだぞ。マスターを狙つた方が断然効率がいいじゃないか。

誰だつてそうする。正義の味方希望の人だつてそうしてた。だから俺は間違つてない。

因みにこの拳銃にはシエパードの靈が降靈しているらしい。クルクルと回したのはカツコつけた訳ではなく、お仕事の時間だよつてワンコ靈に教えているのだ。

『エリー、見つけました。先に始めますね』

『頼んだよ。シャルロット』

『つ！はい！』

妙に嬉しそうなアサシンとの通信を終え、ワンコ靈のお仕事モードを告げるブローバックの音を確認して連中を探し出す。

まあドンパチ騒ぎになるかも知れんが……多少騒いでもダーニック辺りが何とかするでしょ！うん！

……にしても、ブローバック出来るとか凝つたもん作つたなあ。

特別短編話「Merry Christmas!」

「うつ、さつむ。やっぱ冬は冷えて仕方ないな」

冷たくなる手を擦り合わせて暖めながら、トウリファスの城下街を歩く。街の中は既にクリスマスシーズンで模様替えが成されており、様々なイルミネーションが街中をきらびやかに着飾っている。

クリスマスシーズンで仕方ないとはい、チラホラとカツプルがいるのが分かる。分かつてしまう。

幸せそうな姿を見ていることに文句はない。むしろ末永く爆発しろとお祝いしたいくらいだ。

だが！それでも！

「……くつ！俺はあまりモテないというのに、世界はこんなにも残酷なものなのかな……！」

こんなラブラブ空間の中で野郎一人ぼっちでいる気持ちが分かるか!?唯一幸いなのはカツプルどもの視線がこちらに向かないことだが、店の連中は違う！

こらそこ！憐れんだ目で俺を見るな！俺だつて望んでクリボツチしてんじやないんだぞ！

いつもだつたらフイオレやシャルロットが一緒にいるから気にしなかつたが、いないと意外と寂しいんだぞおい！

ならば何故今日に限つて一緒にいないのか。それは少し前から二人から距離を取られているからだ。

理由はさっぱり分からん。フイオレに用事があつて部屋に訪れた時は入れてすらもらえず、シャルロットもフイオレと一緒に何かをやつてているようだが……

「おうまスクのあんちゃん！今日は嫁さん二人は一緒じやねえのかい？」

「ああ、今日は半ば追い出されてな……つて嫁じやねえよ！何回言えば分かるんだ！」

「がはは！なーに恥ずかしがつてんだ！もうこの街じやフイオレちゃんとシャルロットちゃんはあんちゃんの嫁つて認識だぜ？二人とも

否定しねえし、寧ろ嬉しそうだしなあ

「ぬあああ！そんなことを本人の前で言うんじゃねえ！俺だつて待たせちまつて罪悪感あんだよおお!?」

肉屋のおっさんの容赦ない裏話に思わず膝をつきそになるが、おっさんのにやけ面に屈することだけは嫌なのでプライドを保つため何とか踏ん張ることに成功した。

にしてもこのおっさんはとんでもない爆弾を投げつけて来やがる。

そう。聖杯大戦が終わつてからと言うもの、フィオレとシャルロットからのアタックが激しくなつているのだ。

勿論俺だつて二人のことは少なからず想つてゐるし、その気持ちに答えたいのは山々だが……

「フィオレもシャルロットも好きだからどちらか片方なんて決められる訳ないだろ……」

「いやあ贅沢な悩みだねえ！男なら二人とも娶つちまえばいいのによ！あんな美人さんに好かれるなんて早々あることじやねえのに、しかも二人だぜ！おっぱいも大きいし、夜も最高——」

「頭ぶち抜かれてえかエロ親父」

「o.k、冗談だ。落ち着いて話をしようや。な？」

おっさんの下卑た顔に割りと本気の殺意をぶつけてやると、おっさんは冷や汗を流しながらも話を続けようとしてくるので舌打ちしながらも話を聞いてやる。

確かに二人ともスタイルはありえん程抜群だが、他人にそれを下心マシマシで見られるのは非常に不快だ。

いや、優柔不斷で決められてない俺が堂々と言えることじやないけどな！

「んで、何で追い出されてなんかいるんだ？まさか不倫か？ハーレムまだ増やそうつてのか？ええ？」

「んな訳あるか！最近会つたのはレティシアくらいだわ！しかも友達だ友達！」

「あんちやん……あんた……」

「違う！無実だ！俺は誓つてレティシアや他の娘と変なことはしてい

ないと断言出来る！』

確かにレティシアも二人に負けてない、寧ろフイオレが少し不利に見えなくもないレベルだ。だがレティシアは友達であつて下心を持つて接している訳ではない。寧ろそんなことがあればフイオレが瞬時に気付いて最強の鎖に縛られて地下室投獄待つたなしだろう。

「俺がなんかしたのか……最近距離置かれてるのがマジで寂しい……」

「お、おう。なんかわりいな。まあなんにせよ、怒らせちまつたんなら機嫌治してやるのがモテる男の条件だぜ？ほら！この肉持つていきな！それとプレゼントもだな！折角のクリスマスなんだ、プレゼントも込み込みで想いを告げりや一発よ！」

「おいおい。そんな易々と——「待った！」ふあ!?」

おっさんに後押しされて送り出されそうになつた瞬間、玩具屋のおばちゃんが突如待つたをかけてきた！

しかもいつの間にか他の店の店員さんたちもワラワラと寄つてしまっているではないか！

お前ら仕事しろよ！なんでこんな寂しい男の近くに寄つてきてんだ！！

「話は聞かせてもらつたよ！なんだいあんた、フイオレちゃんとシャルロットちゃんに嫌われるなんてあつちやいけないよ！あの娘たちがあんたと一緒にいる時は本当に幸せそうな顔しててねえ。あたしらにとつちやあの娘たちが幸せそうにしてる姿が楽しみなのさ！いつも仲良くさせてもらつてるしね」

「そうだぜ！フイオレちゃんの笑顔が俺の生き甲斐なんだ！泣かせたら許さねえぞおい！」

「ばつかお前！やっぱシャルロットちゃんだろ！あの天使のような笑顔にあのおっぱい！最高だろ——「死に晒せ！」ぐぼあ!?」

「ふつ、憐れなやつだ……レティシアちゃんのことは俺に任せな！俺がエリクスイールの分まで幸せにしてやるからな！」

「いや、前に聞いたらお前のことは覚えてなさそうだつたぞ。申し訳

無さそうにしてたのが印象的だつたな」

「ぐはあああ!!」

どんどん湧いて出る変態を殴り飛ばし事実を突きつけたりしてさばいていく。

やがて連中はやれうちの店に寄つていけ、やれこれを持つていけど否応なしに荷物が増えしていく。

なんか滅茶苦茶どんぢゃん騒ぎになつてゐるが、結局のところ連中の言うことはただ1つだつた。

「「早く仲直りしてきな！んでまた三人で顔見せてくれ！」」

そんな言葉に思わず目頭が熱くなつてしまつたのは、不覚だつた。

聖杯大戦を終え、城には最早俺とフイオレ、ケイローン先生とシャルロットの4人が住んでいるだけだ。

ダーニツクとヴラドは平穏な隠居生活を、セレニケは旅に出たアストルフオを追つかけて、ゴルドのおつさんはホムンクルスの研究に全力を注いでおり、カウレスはフランと幸せそうに生活している。ロシエとアヴィケブロンもゴーレム作りに精を出してるしへークとジーグフリードはレティシアと共に普通の生活を謳歌している。

この城もフイオレがダーニツクから引き継いだものであり、今やユグドミレニアの長となつたフイオレも様々な問題に追われたりするものの、俺たちとの生活を謳歌しているようだし、俺が手伝える範囲であれば俺も一緒に手伝つてるので持ちつ持たれつの関係を築いている。

シャルロットに関しては進んでメイド家業に励んでおり、俺のことを見た那様と呼ぶことにハマつてゐるらしい。まあ本当に慌ててる時は普通にエリーと呼んでくるのだが。

ケイローン先生はそんな俺たちを見守ってくれる父親みたいな存在になりかけている。実際ケイローン先生の教えは色々とためにいることがあるから、俺としても非常にありがたい。

「ただいま……」

「「Merry Christmas!!」」

「!?」

沢山の荷物を運びながらも静かに扉を開けた瞬間、クラッカーの音と懐かしい面子が揃い踏みで出迎えてくれた！

見れば隠居生活をしていた筈のダーニックとヴラド、旅に出ていた筈のアストルフオに追っかけのセレニケ、レティシアやジーカたち、ゴルドのおつさんもいるしカウレス夫婦（仮定）も一緒だ！

しかもなんかイルミネーションで飾られたゴーレムもいるし!? 口シェとアヴィケブロンも来てるのか！

「こ、これは？みんな何でここに!?」

「ここは元々余とダーニックの城だぞ？余がここに訪れることは何ら不思議ではあるまい」

「相変わらず元気そうだな、エリクスイール。フイオレのサポート役はしつかり出来ていいのだろうな？」

「やつほー！みんな元気そうでなによりだよ！うーん！やつぱりこのメンバーが一番だね！」

「私はアストルフオがここに来たいって言つたから着いてきただけよ。別にあなたたちに会いに来た訳じゃないわ」

「ふん！小僧が何かしでかしてないか心配してやつてきただけだ！まあ何も問題は起こして無さそうだからいいがな」

「ここにちはエリクスイールさん！先生と一緒に遊びに來ましたよ！」

「僕も口シェもたまには息抜きが必要だと思つてね。友達に会いに來たつもりが、こんな状態さ」

「姉さんから来てほしいつてお願いされたからな。フランも一緒に行きたいくつて言つてたから連れてきたら、まさかこういうことだつたなんてね」

「うー！」

「友と少し振りに飯を食うのも良いと思つてな。レティシアから今日話を聞いて、ここまで赴いたんだ」

「少し振りです、エリクスイールさん。仕事の紹介ありがとうございます！」

「ふふ、今日は人が沢山いますね。みんなエリーのことが好きなんですね」

「ええ。エリクスイールは人気者ですからね」

なんだかんだ言つて、懐かしい面子が揃つたことでみんな嬉しそうだ。かくいう俺も嬉しさが込み上げている。

みんなの話を聞いている中、俺に向かつてくる二人の姿が見えた。フィオレとシャルロットだ。二人とも満面の笑みだ。

「お帰りなさい、先生。追い出すようなことをしちゃってごめんなさい！どうしても先生驚かせたくて、追い出すような真似しちゃいました」

「フィオレのことを怒らないで上げて、旦那様。フィオレは旦那様を喜ばせたくて、みんなに声をかけて下さったんです。勿論私も」「フィオレ……シャルロット……そうか。そういう事情だつたんだな。俺はてっきり一人を怒らせてしまつたのかと思つてたんだ。最近距離も離されてたし、二人を待たせてしまつての俺が悪いんだけど……」

「「そんなことないです！」

俺の言葉に二人は食いぎみに否定すると、俺の前まで詰めよつて来て抱きついてきた！

や、やっぱい！もうなんか色々とヤバい！なにがとは言わないが、柔らかすぎて理性がヤバい！

『おっぱいも大きいし、夜も最高に楽しいよな？な？』

うああああ！！やめろおっさん!!そんな悪魔の言葉に耳は貸さねえからなあ?!?!「と、とりあえず二人とも離れてくれないか？なあ？」

「嫌です」

「何で!?」

「好きだから」

「みんな見てる前では止めて?!?」「「「はあ……お熱いことで」」」

心底嬉しそうに柔らかボディをこれでもかと擦り付けてくる二人を俺の理性の為にも引き離し、みんなへと向き直る。

折角みんな集まつてんだ。これはもう楽しまなきや損だろ！

「よし！奇跡的にみんな集まつたんだ！今日はみんなで楽しもうぜ！」

「「「「おおー!!」「」」」

みんなが思い思に楽しんでいる中、俺はみんなとは少し離れてバルコニーで酔いを冷ましていた。

中ではもうアストルフォを中心の大盛り上がりしていく、ジークやロシエ、カウレスが巻き込まれている。

「あちやー、ジークのやつすっかりアストルフォの絡み酒に捕まつてやがる。ありや當分解放されないな」

「せーんせ♪お隣いいですか？」

「ん、いいよ」

「やつた♪じやあお隣失礼しますね♪」

フイオレは赤くなつた顔のまま俺の隣に腰を落ち着けると、俺の肩へとこてんと頭を乗つけてきた。

女の子特有の花のような香りに仄かに酒の匂いも感じる。こいつ軽く酔つてんな？

「せんせえ。いつもありがとうございます」

「ん？なんだいきなり」

「いきなりなんかじやないですよ？いつも感謝してるんです。きっと

わたし一人だつたらユグドミレニアの長としての重責に押し潰され
てたかもしません。だからせんせえが一緒にいてくれて、とつても
嬉しいんです」

「フィオレの役に立ててたなら良かつたよ。俺には少し手伝うことく
らいしか出来ないからさ」

「そんなことありません。わたしはせんせえがいてくれたから頑張っ
て来れるんです。だから、わたしがせんせえを嫌いになることなん
て絶対ないんです！」

「お、おう。分かったから！近い！近い！」

真っ赤になつたフィオレの顔が俺のすぐ目の前にあり、吐息が俺の
顔にかかりくすぐつた。

「というかなんか目が潤んで来てるんですけど……!?

「せんせえ……好きです……大好きです……！」

「フィオレ……俺は……」

色香漂うフィオレの姿に視線が釘付けされ、抗うことも出来ず流さ
れるまま俺は――

「あーー！フィオレつたらざるい！わたしも混せてくださいな♪エリー
♪わたしも愛してください♪」

――フィオレと重なる前にほろ酔い状態のシャルロットが乱入
してきたことで、唇が触れる数ミリで停止した。

……うわああ?!俺としたことが場の雰囲気に流されてしまつ
たあああ?!

いや嫌じやないけど!!寧ろ寸止めされて少し残念だけど!!そういう
う関係になつてもないのにそんなことは許されないだろ?!

「むうう……シャルロット、タイミングを読んでよお……」

「わたしだつてエリーに愛されたいんですもの。それにもう待つのは

止めましょうって話したばっかりですよ?」

「…な、何の話だ?」

な、何故だ? 何やら途方もなくどんでもないことが起きる。そんな気がする!

そしてそんな予感が見事に的中する!

「エリー、わたしもエリーを愛しています! でもエリーがフイオレかわたしかを選べないのは仕方ないので、フイオレと話し合いました!」

「へ、へえ……それって—— 「んちゅ……」 んむ!?」

「あー!!」

小悪魔チックな笑みを浮かべたシャルロットに警戒心を持つたその瞬間、俺の唇はシャルロットの唇に塞がれていた!
それを見てフイオレが声を上げていた!

「ブハ……ふふ、エリーとキス、しちやいました♪」「な、なにがなんで?!」

「フイオレと話し合いしたのは他でもありません。わたしとフイオレ、二人とも愛してください♪」「は……はああ?!」

シャルロットのどんでもない提案に思わず開いた口が塞がらない。だが、そんな隙をフイオレが見逃す筈もなく。

「せんせ! ちゅ……くちゅ……ちゅぱ……」「んぐ!」

「ぴちゃつ……ちゅく……」

容赦なくキス魔と化したフイオレの口撃が俺の口の中を蹂躪してくる!

暫く口内を堪能していたフイオレだったが、息継ぎの為に口を離すと、俺とフイオレの舌に銀色の橋が掛かっていた。その光景に思わず俺の顔が熱くなるのが分かり、シャルロットが羨ましそうに此方を眺

めていた。

「はあ……せんせえとキス……ふふ♪」

「はあ……はあ……お前ら、こんなこと……」

「せんせえ……わたしたち本気ですよ？ わたしもシャルロットもせんせえを独り占めしたいんです。でも、そんなことになればわたしもシャルロットもきっと我慢出来なくなっちゃうと思うんです。ですから、わたしたち二人とも愛してください。お願ひします！」

そんなこと許されるのか？ だつてそれって道徳的に良くないだろ？

でも俺としてもフイオレかシャルロットかなんて不甲斐ないことには選べない。

これは間違いなくどこまでも堕ちていく甘い罠だ。でも、二人と一緒にならそれでもいいと思える。二人とも俺が幸せにしてあげたいのが本音だ。

「……本当にいいのか？こんな不甲斐ない俺で、二人ともいいのか？」

「わたしはせんせえ以外考えられません！」

「わたしはエリーを愛しています。他の男性を好きになることはないと断言出来ますよ♪」

フイオレの熱烈な想いに、シャルロットの包み込むような優しさに、俺はついに最低の答えを出した。

「……分かった。フイオレ、シャルロット。俺が必ず幸せにしてみせる。こんな形でしか答えられない最低な男だけど、俺は二人とも愛している。俺と、付き合ってくれ」

「……っ！ はいっ！ 喜んで!!」

涙ながらに左右から抱きついてきた一人を思い切り抱きしめ返してやると、よりいつそう強く抱きついてくる。

そんな感覚に俺は心の底から幸せを感じていた。

「おーいそこのお三方！ 写真とろーよ！ 集合写真!! 速く速くー！」

「分かつた！すぐ向かう！行こうか、ファイオレ、シャルロット」

「はい！せんせえ！」

「はあーい。ふふ、みんなで写真なんてワクワクするわ♪」

三人で中に戻ると、既にアストルフオ達が並んで準備を終えていた。レティシアの手招きで俺たちは真ん中へと誘導され、カウレスがカメラの設定をしていた。

「姉さんたちも義兄さんも速く並んでくれ」

「はいよ弟くん」

「弟くん言うな！全く。それじゃ撮るぞ」

設定を終えたカウレスが並び、アストルフオが元気よく声を上げた。

「よーし、じゃあみんなちゃんとポーズ取つてね！はい、チーズ！」

パシヤツ！

こうして彼らのクリスマスは無事に終わり、みんなも元の場所へと帰つていった。

彼は相変わらずファイオレたちと一緒に幸せな生活を送っている。二人の相手は色々と体力を使つて励んでおり、本人いわく『世界一可愛い嫁が二人もいるんだと思うとなんだつて頑張れるさ』とのこと。

「旦那様ー。奥様がお呼びですよー」

「分かつた。すぐ行くよ」

彼は眺めていた写真たてを置き、ファイオレの元へと急ぐ。

その写真に写っていたのは黒の陣営と呼ばれたユグドミレニアの選ばれたメンバーであり、生涯の友と誓い合つた者たちの姿。そしてその中央に、幸せな笑顔を満開にさせ、左右の腕に抱きつく一人の少女があり、彼の困ったような笑顔は誰よりも幸せそうであった。

§
M
e
r
r
y

C
h
r
i
s
t
m
a
s
!!

E
N
D
§